
あの日に。

酒主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日に。

【Zマーク】

Z2738E

【作者名】

酒主

【あらすじ】

1980年代街はキラキラで、不良少年少女が流行った時代。純粋すぎるハルとユウの物語。

0・ハルとユウの物語

今日は出て来た。

今まで我慢してきた。

いいよね。いいんだよね。お母さん……。

「ユウ！ いねえのか？」

ボボボボボボボボ

単車の音がして。靴の引きする音。ハル。

彼は、時々ここにやつてくる。私も知ってる。

だから待つてた。

だけど、素直に出て行くのもちよつと悔しい……。

海岸沿いにある、と・あ・る・公園の真ん中。

渦巻き状のカタツムリみたいな滑り台の死角に隠れ、ハルの声を
聞く。

「ユウ！」

「ユウ！」

ハルの声が大きくなる。段々近づいてくる。
私はハルの声が近づくにつれ、目を閉じる。
私はハルが好きで好きでたまらない。

「ハル……」

夜の光はピカピカで、彼の後ろに載つて眺める街は別世界のよう

だつ
た。

私の名前は町田コウ。この4円から中学生をやっています。お父さんはいなくて、お母さんが1人。ついでに言えば、お父さんもどきが1人いる。

「コウ！ コウ！」

隣の部屋から聞こえてくる、ガラガラ声のこの人がお母さん。髪はふわふわの金髪なくせして「不良なんかになっちゃダメ」というのが口癖。大人はおかしい。

「お母さんね、今から仕事行ってくるから、鍵しめといてね」「はーー」

「もつ。お菓子食べながら返事なんかして。子供はいいわよね、呑氣で！」

お母さんは飲み屋で働いていて、いつも夕方には機嫌悪そうに家を出て行く。長いスカートをヒラヒラさせて、それで、上のシャツはピッタリとくっついていて。自分の母親ながら綺麗だと思つ。

私は誰に似たんだろう？

目は小さいし、鼻も上むいてるし、顔も丸んでお母さんには似ても似つかない。私が小さい時に別れたお父さんに似てるのかかもしれない。けど、お父さんの写真は全然ないから分かんない。

お母さんみたいに、綺麗だつたら良かつたのに。一度、お母さんに聞いてみた。

「私つてお父さん似？」つて。

「違うわよ」

「じゃあ、お母さん整形したの？」

そう言つたら「仕事行く前にぐだらない質問しないでよ」つて凄く嫌そうに答えてきた。やっぱ、お母さんのそういう所が嫌い。顔以外はぜーんぶ嫌い。

言いつぶされたけど、お母さんに似ているといふもある。

ふわふわの髪。

私は結構気についてる。

お父さんもどきについて。

この人はつい最近まで、居候だと思つてた。眞面目そうな顔で、時々「ごはんをよばれに来る。風呂まで入り泊まつていぐ。そしてお母さんのことを「由梨さん」と他人行儀で呼ぶ。お母さんはこの人のことを「あの」とか「その」で呼んでいる。

この人がお母さんと付き合つているとわかつたのは、中学生になつてから。今まで気が付かなかつた自分も自分だけど、この人の話を友達にしたら、「それ、お母さんの彼氏なんじゃないの?」ってバカにされた。

お父さんもどきは根暗で、全然格好よくない。どうせ付き合つなら、マツチみたいな人と付き合えればいいのに。しかも、私にまで敬語を使って、どうかしてる。だから、あまり話してあげないんだ。

お母さんが出て行くと、私は鍵をかける役目。

「火事になるから火は使わないで」といつも言つ癖に、タジはんはボンカレーしか用意してない。

だから、内緒でガスコンロに火をつけて、コトコトあつためる。お腹が空くから、玉子焼きだつて上手に焼けるようになつたし、チヤーハンだつて作れる。

いいお嫁さんになれるかも、なんて。

私の家はアパートの2階。夜はお母さんがいないので、小さい頃は怖かつたけど、もう慣れた。ベストテンやドラマだつて見放題。誰にも文句言われないなんて最高。寂しくなつたら、友達の家に電話すればいいし、結構今的生活が気に入つてゐる……かも。

「お母さん! 何で起こしてくれなかつたのー」

時計は8時を指している。

夜中まで、テレビを見てたから遅刻寸前。寝ているお母さんに向かって文句を言つけど「うつさい」つていう返事。本当に、普通の家庭つていうのに憧れる。

「コウちゃん起きなさい。」はんよ。

起きたら、トーストと田玉焼きと、私の好きなプリンが並んでいて、というのが私の理想。

妄想はこのくらいにして、何も食べず学校まで走る。飴をつかめるだけ持つてポケットに入れる。お腹が空いたらなめる。これが私の朝の光景。え？ 早寝して早起きしたらいいじゃんかつて？ 無理無理。昔から夜型なんだ。私。

「遅ーい」

校門の前で、生活指導の山田につかまる。何故か、手には竹刀を持つて仁王立ちしている。生徒をいびる事が、山田の生きがいなんだと思つ。

「すみません。寝坊しちゃつて」

頭を下げるが、セーラー服の胸ポケットに忍ばせておいた飴がポロポロとこぼれた。

「町田、だつたな。1年のくせにたるんじるな。ちょっと職員室に来い」

「えー、でも。朝の会はじまっちゃいます」

「いいから来い」

山田は廊下を歩くとき、威嚇するように竹刀をバンバンと廊下に打ちつけながら進む。四角い顔、七三に分けた髪。太いまゆげ。途中、上級生とすれ違ひジロジロと見られる。

「あいつ、何やつたんだよ」

3年生の翔子先輩だ。床すれすれのスカートにパーマ。不良少女と呼ばれて出てくる人みたいだ。うちの中学校では翔子先輩を知らない人はいない。

山田は翔子先輩には何も言わず、どんどん職員室に私を連れていく。

私、何も悪いことしてないのに。翔子先輩の服装の方が問題あるんじゃない?

山田先生、何で注意しないの?

大人は不思議だ。

ガラガラガラ

山田は大げさに職員室のドアを開けた。担任をしていない先生が3人くらいいて、こっちをじろじろ見てている。その中を通して、校長室の横にある応接間に連れていかれた。

山田は茶色いビニール張りのソファーアに腰掛けると、足を広げて偉そうに言った。

「お前、この前から遅刻寸前だな」

「はい。あの。お母さんが」

夜の仕事と言いかけてやめた。何も知らない小学生のとき、茜つていう友達の家にいってお母さんの話をしたら、次の日から、茜は話してくれないようになつた。

中学になつて一緒にクラスになつてから「あの時はごめん。お母さんがコウとは付き合っちゃダメだつて言つたから」つて謝つてくれたけど、ショックだつた。きっと私が茜に傷つく事を言つて怒らせてしまつたんだ、つて今まで思つてたのに。まさか話してくれない理由が、私のお母さんにつたとは思つてもいなかつた。だから言わないことにしてた。

「お母さんが? 起こしてくれなかつたでもいいたいのか。もう中学生だろ。しつかりしろ」

バンッと竹刀が床を叩いたので、私はビックリしてしまつた。山田は驚いている私の顔を見て満足気な表情をしている。

「それからー」

山田は必要以上に大声を張り上げた。

「髪、染めてるのか? やけに茶色いじゃないか」

「地毛です」

「地毛なんて言葉知つてんのか! そんな事言つ奴に限つて染めて

んだよ」

なんか、ドラマみたい。この先、髪の毛つかまれて殴られるのかな？ 私。

ガラガラガラッ

救世主がやつて來た。

「ま、町田さん。どうしたの？」

担任の森あや子先生。顔は、菊池桃子と斎藤由紀を足して、んーと、とにかく可愛い感じ。私の代わりに必死に山田に頭を下げてくれている。

「森君。もうちょっと生徒に厳しくしないと、なめられますよ！」「すみません。私からも言つて聞かせますので、もうよろしいでしょうか？」

「それと、町田の髪の毛、茶色いから親御さんに電話しておいた方がいいな。あー、そうだそうだ。学校に飴を持ってきたことも言つていてくださいよ」

「は、はい。わかりました」

あや子先生は私の腕を優しく握つて、職員室から救出してくれた。

「先生、ありがとうございます」

「今度から、きちんとしてね」

「うん」

先生に連れられて、教室に入った。朝の会の途中だつたらしく、全員がこちらをジロジロ見る。なんか、やだなあ。この感じ。

「おい、バス！ 何やつたんだよ」

クラスの格好つけの慎也が口火を切つた。学制服の下に赤いTシャツを着て、わざとみんなに見せているようだ。もちろん、制服の袖もクルクルと折つていて、アイドルの真似をしてるみたい。それなのに、一步教室から出ると、袖も几帳面に元に戻して、しかも襟もしつかり留めて、赤いTシャツがみえないようにしている事をみんな知つてる。

小心者の格好つけ。

そんな男子のことはどうでもいいので、さつさと席に着いた。

「何だよシカトする気か？ ブス」

「やめなさい。町田さんは少し遅刻しただけです」

あや子先生はコホンと咳払いした。白いブラウス、黄色のカーディガン。フレアースカート。男子の中でもあや子先生に憧れている人はいるみたいだ。

こんな人がお母さんだったらな。

そんな事を思った。

2・私の友達

私が通う港南中学校は、港南小学校と佐倉小学校の2校の生徒が集まつて来ている。港南地区は、古くからの団地の人が多くて、佐倉地区は最近できた住宅街なので、新しく越してきた人が多いつてお母さんが言つていた。

私がよく遊ぶ友達は茜、美穂、弥生の3人。茜と私は港南地区で、あの2人は佐倉地区に住んでいる。中学校にあがつてから、まだ2ヶ月あまり。美穂と弥生は本当にこの先も友達でいるのかどうかは分からぬ。けど、今の所、一緒にいて楽しい。

「ユウ！ 今日放課後遊ばない？」

ショートカットの美穂だ。2人でトイレにも行く仲になつたのがちょっと嬉しい。

美穂は、小学校の頃からソフトボールをしていて、体もこつこつ、顔も真っ黒で、よく男の子と間違われている。

「珍しいね、美穂が誘うなんて」

「今日ね、監督が出張で、クラブ休みなんだ～」

5月だというのにもう日焼けしている顔に、真っ白い歯がのぞく。美穂があまりにも嬉しそうに笑うので、つい私も「ココニコ笑う。

「ねえ、茜と弥生も誘おうか」

「うんうん賛成！」

トイレから戻つて教室を見渡すと、一番後ろの席の弥生の周りに女子が7、8人群がつていて、何やらキヤーキヤー騒いでいる。その中に茜もいた。

「茜っ」

「うわっビックリしたあ」

「ねえ、何見てるの？」

「明星よ、みょうじょう」

明星と言つとき、茜が思いつきり小声になつたので、つい私も口

をおおえてしまつた。

弥生の手には「週刊 明星」と書かれた雑誌があつて、表紙には最近流行つてゐるチョッカーズときょんきょんの写真が載つていた。
「ねえ、マッチと俊ちゃんに結婚を申し込まれたら、どうちにする？」

「えー、究極の選択だねー。そんならさ、生まれ変わるなら、明菜ちゃんがいい？ それとも聖子ちゃん？」

「んー。きょんきょん」

「美穂つたら、もうー！」 答え違つじやんつ

私はみんなの輪の一一番外から、弥生が持つてゐる雑誌をのぞきこんだ。

いいなあ。私も今度買つてもらおひ。お母さんが買つてくる本つて言つたら、学研のやつとか「中学1年生」つてやつ。あんまり買つ物にも連れてつてくれないから、最近の雑誌のことなんか全然分かんない。

それにしても弥生の持つてゐるものは、他の子より上な感じ。しかも、弥生ん家は佐倉団地にあつて、新築でピカピカらしい。本当にひりやましい。

神様お願ひつ。1日だけでもいいから、私が明菜ちゃんになつて、お母さんがあや子先生になつて、ピカピカの家に住むつてのはどう？ 無理だよね……。

「おー、ブス！ じけ」
格好つけの慎也だ。大つきらい。

「シカトすんな、じけよ」

最近、妙に私だけにつつかかる。いじめてるつもりなんだらうけれど、全然怖くないし。知らん振りして、じいてやらなかつた。

慎也は腹をたてて、私の机を蹴つ飛ばした。

雑誌を見てキャーキャー騒いでた他の子達も、机が倒れる音にびっくりして慎也の方を見た。

「ちょっと、ひどいじゃないのー。ちゃんと床しなさいよ」

美穂が大きな声を出した。美穂の声につられて、弥生の周りにいた女子が皆、声をあげた。

「ひつどーい」「最悪ー」と口々に言つもんだから、慎也は頭から火がでそうに怒つて。それを見てたら可笑しくなつた。

みんなが味方になつてくれて嬉しい。

だけど、とても気になる事があつた。なんで茜は黙つてたんだろう。

美穂も弥生も慎也を攻撃してくれてたのに……。すゞく氣になる。もしかして、茜つたら慎也のこと好きなの？ まさかね。

「ねえ、弥生。 今日放課後あいてない？ コウとみんなで遊ぼうよ。ね、茜はどう？」

美穂が急に話題を変えた。

「うわー。ごめん。今日ピアノがあるんだあ」

弥生は顔の前で手を合わせて、ごめんのポーズをとつていて。ピアノ休もうかなあ」なんて、真剣に迷つてゐみたいだつた。

「弥生はピアノ習つてんの？ お嬢様じやん」

「ユウつたら。やだ、そんなんじやないつてー」

「ね、そんで茜はどうなの？」

さつきから浮かない顔をしている茜に、声をかけてみた。小学校の頃から知つてゐるけど、茜の気分屋には慣れている。

「うん。行こうかな。だめだつたら電話する」

茜の返事。

茜がこうやつて眉間に皺を寄せながらも、作り笑いする時は気のらない証拠だつて事を知つてゐる。茜は2つに分けた髪の束の一方を指でくるくる絡めてはほどき、絡めてはほどきを繰り返してゐる。多分、茜は来ない。

何にも知らない美穂は「じゃあ、いつぺん家に帰つてから4時30分に「ブーケ」の前に集合！」つてガツツポーズを決めた。

ブーケは佐倉地区に新しくできた雑貨屋さんで、弥生いわく、文房具や歌手の写真なんかも置いてゐるつて聞いた。私はまだ行つたこ

とがなーいので、おーじくワクワクする。西も来ればいいの!。

「ただいまー。お母さんいる?」

鍵が開いてるからいるんだひつかだ、つい聞いてしまつ。

「うん、おかえり」

お母さんが「おかえり」って言つてくれる時は大体機嫌がいい。機嫌が悪いと「おかえり」の代わりに「遅かったわね」とか「部屋の掃除しなさい」とか言つのでわかり易い。

運が良かつたら、お小遣いをくれるかもなんて、少し期待をしてしまつた。

「ね、お母さん」

「んん?」

お母さんは、食卓のテーブルに座つて珈琲を飲んでいる。仕事に行く前の儀式みたいだ。昼間はもつたいたからつて、部屋の電気を消してるので、日当たりの悪いこの部屋は余計暗くなつてじめじめして、なんかやだなあ。弥生のピカピカの家を想像すると、益々この家がいやに思える。

「ね、ね、お母さん」

お母さんが振り向かないの、何度も呼びかけた。

「何? 頼みごと?」

「うん」

私がお母さんの事を分かり易く思つると同じよう、お母さんが見つけて私は分かり易いのかもしね。お母さんの子供だから、当たり前か。

「何? はつきり言ひなさい。グズグズしてんのは嫌いだからね」

お母さんの機嫌が悪くならないうちに、私は慌てて、美穂と買い物に行く事を話した。

「そ、珍しいわね。はいっ」

「え？ 1000円もくれるの？」
「いらなかつたら、しまつよ」「やだやだやだ」
あつさり1000円をもらつた私は、制服のまま待ち合せ場所に向かつた。

自転車に乗って、風を感じるのが大好き。特に、春の風は気持ちいい。これから先、何回春が来るかしれないけど、この風の匂いは忘れない。おばあちゃんになつたって、今吸つた、私の胸の中にある空気の記憶はなくならないと思う。

アパートを出て、自転車にまたがり、私は学校の前まで来ていた。学校を少し通り過ぎた交差点を右に曲がると、佐倉団地に続く道がある。そこは新しく整備された道で、学校で言えば新校舎につながる渡り廊下つて感じ？

佐倉団地が遠くに見え、それら全体はヒカヒカに見えた。団地へと続く道は上り坂になっていて、ギアのついてない私の自転車は勢いを失い止まってしまった。そこから先は自転車を押してボトボと歩いた。

ヴォ――――――ン

田地の方から、大きな音をたててバイクが下ってきた。

私の髪をくしゃくしゃにした。

バイクに載つていいた男の子は金髪で、顔はよく見なかつた。どうやら三歳三名の子だ。

それでも、佐倉団地に続く坂道は急で、自転車を押しながら思つた。美穂と弥生は、毎日この坂を上つて帰るんだつて。しんどいな。

ヴォヴォヴォヴォ

私が坂を上りきった頃、下つていつたはずのバイクが戻ってきた。
背面から聞こえてくるバイクの轟音は次第に失速し、私の後ろで止
まつた。

「おいつ
何だか嫌な予感。

ヤンキーさんの声が背後でした。少しかすれた様な声……。

関わっちゃダメだ。私は聞こえないふりをして自転車にまたがろうとした。

「シカトすんなよつ、中ボー」

後ろにいたはずの不良は私の前に回りこんで、行く手を遮った。その時、ふわっと風が舞つて、不良の金色の前髪が後ろへなびいた。日差しを受けたその顔はとても綺麗で涼しげだった。切れ長の目のせいかもしない。男の人なのに綺麗だと思った。

「なあ。お前、港南中だろ？ 翔子の家知んない？」

彼は苗字は言わなかつたけど、多分翔子先輩のことだ。目の前にいる金髪の男の人は、翔子先輩のなんなんだろうか。

「知らない。私1年だから……」

不良はしばらく私の顔を覗きこんでニヤツと笑つた。やんちゃそな顔つてそう思つた。

「じゃつ、これあいつに渡しといてくれる？」

彼はポケットから紙切れを取り出して私に握らせた。

そんなん無理。無理、無理、無理。

翔子先輩と話をしたこともないし、第一、私が渡すつておかしくない？ 絶対おかしいよ。

「ダメダメ、無理つ

私は紙切れを返そうとしたけど、彼はエンジンをかけ去つて行った。

「ちょっとー！ 無理だつてー」

バイクにまたがつた彼の背中に呼びかけたけど、あつと/or>いなくなつてしまつた。

人の都合も考えず何て自分勝手な人なんだろつ。

そつか。自分勝手だから不良なんだ。

それにしても、この紙切れ。何が書いてあるんだろう。それで、どうやつて翔子先輩に渡したらいいんだろう……もう。何か変なことに巻き込まれなければいいんだけど。美穂と買い物するどころじ

やなくなってきた。段々と気が重くなるのを感じた。

団地に入つてすぐの角を右に曲がると、ブーケと書いた店がすぐ見えた。一軒屋くらいの大きさで、そんなに広くない店内は、他の女子中高生であふれていた。中でも、アイドルの写真やポスターの前に、みんな群がつていた。

店の前で美穂が手を振つている。

「ユウ！ 茜は？」

「うん、電話も無かつたし……来ないんじゃないかなあ」

「ふーん。ま、いつか。中に入ろうか」

しばらく、じつた返す店内に入つていて、他の女子中高生のようすにアイドルの写真やらポスターに見入つていた。

「ユウ。いいの見つかつた？ 私、これ買うわ」

美穂は嬉しそうにきょんきょんのポスターを選んだ。他にもシャーペンや匂いのする消しゴムなんかを手に持つていた。結局私ははどうと、頭の中が買い物どころじゃなくて、どんどん気が重くなつていいくばかり。

でも、何も買わないと、誘つてくれた美穂に悪いし、適当に選んで買つた。

お金を払つて、外へ出た。美穂はきやつきやと話ながらよく笑う。外見は男の子みたいだけど、話すととても可愛い女の子。私はそんな美穂が好き。

美穂に出会つて、覚えたこと。

人は外見と違う。つてこと。

「どうする？ これから」

「うん、帰るね」と美穂は言つた。「もっと遊びたいんだけど、家、厳しいからやんなっちゃう。6時が門限だよー。あり得ないよね」

美穂は口をとがらせて言つた。

門限か。私の家には無いこと。

夜は誰もいないんだもん。帰りが遅いつて叱る人もいない。

普通の家の美穂がうらやましいよ。

「私も遅くなると怒られるから、帰るね」
なぜだかわからないけど、美穂に嘘をついてしまった。怒られなんかしないのに。

「今度、休みの日にゆっくり遊びたいね。」
美穂とはここで別れた。

長く急な坂道をあつという間に下り、家へ向かった。車どおりの多い海岸沿いの道を進むと潮の香りがした。また、ふわっと風が舞つて、自転車を止めた。

預かった紙切れ。何が書いてあるんだろ。

ふと、そんな気分になつて自転車を降りた。

力サカサカサカ

ポケットから紙切れを取り出してみた。

大学ノートを切り取つたような感じ。4つ折になつていて、思いつつ開けてみた。

『T.O.翔子

今度集まりあるから、電話して

b/s やす』

手紙の下の方に、電話番号が書いてあつて、その横には下をペロッと出した表情の男の子のイラストが書いてあつた。イラストの男の子はピースをしていて、可愛く描いてあつた。

絵、上手なんだ。と感心したけど、次の瞬間驚いた。

吹き出しの中に「一回させて」の文字。

何だか大人な感じの手紙。

私だつて「させて」の意味くらいわかる。

「あーもつ。こんな手紙、翔子先輩に渡せる訳ないじゃん~」
しばりく 金髪の彼と翔子先輩のことで頭がいっぱいになつた。

美穂と買い物を済ませ、私は海岸沿いの道を進んだ。

その間中ずっと、不良少年から渡された手紙のことを考えていた。翔子先輩に渡すべきか、渡さないべきか。頬まぶたから渡さなくちやいけない様な気もするけど、受け取った翔子先輩のリアクションが予測不可能なので、怖い。最悪の場合は手の甲に焼きを入れられて、トイレでボコボコにされる……？

渡さなかつたらどうなる？ 集まりに来ない翔子先輩が責められ、そこで、それに怒った翔子先輩が他の不良達を引き連れ、1年の教室に来る。そこで私は校庭中を引きずりまわされ、そのまま海まで連れて行かれ、海に投げ込まれる……。

まだ、トイレでボコボコにされた方がましか。

気がつくと、海岸沿いに最近作られた公園のベンチに座っていた。横目で時計を確認すると針は7時を指していた。辺りは薄暗く、ベンチから見下ろした海は真っ黒に見えた。後ろは、さつきまで通っていた道。車のヘッドライトが背後でめまぐるしく行き来しているのを感じた。

こんなに帰りが遅くなつたのははじめて。

そして、夜の街もはじめて。

いつも夜は部屋で1人きり。テレビとにらめっこ毎日。友達に電話をかけてもすぐに切られる。決まって「お母さんが長電話なんてやめなさいって言うから」っていう理由で。

「つまんない、つまんない、つまんない」

呪文のように独り言を繰り返した。波の音は、車の音にかき消されてほとんど聞こえない。

私の言葉だつて誰にも聞こえない。

「寂しいよ……」

つい本音が出た。

昨日ほどんど寝られなかつた私は、朝の4時頃に眠つてしまい、そして今にいたる。

8時15分。

どんだけがんばつても、遅刻間違いなし。仮病を使って休むつていう手もあるけど、手紙を渡すという使命が私にはある。重い頭を抱えながら、制服に着替えた。

「ちょっと、ユウ！ まだ学校行つてないの？」

ふすまの向うから、布団で横になつてゐるだらうお母さんの声がする。一応、心配はしてくれてるみたい。

「お母さん、学校に電話して！」

「は？ 何

いつもの嫌そうな返事。

「何でもいいから、遅刻の理由を作つて電話してよ」

「あんたが寝坊したのが理由でしょ。それ以外にどう言えつちゅうの？」

「ユウは低血圧で、起きられない体质つて医者が言つてたので大目にみてくださいとか

「バカッ。今なら、まだ朝の会だから、グダグダ言つてないでさつさと行きなさい！」

「あ、いい事考えた。朝起きたら自転車が盗まれてて、探してたら遅くなつた、とかどう？」

ふすまの奥はシーンとしている。さつとお母さんは学校には電話をかけてくれない。娘が学校で先生にいびられても、平気なんだ。こんなにも私は苦労してゐるのに。

「お母さんのバカッ」

嫌々学校に向かつた。

学校に近づくにつれ、自転車を「ぐぐスペード」が少し落ちたようこ思つ。早く行かなくちゃという気持ちとはうはうら、体は学校に

対する拒否反応に支配されている。学校に対するつていうか、生活指導の山田について言つた方が正しいかも。

校門がみえてきた。いつもは、ワイワイとしている校門前も、案の定、朝の会がはじまっている時間である。ひつそりとしていた。

「ラッキー」

山田の姿が校門前にはないので、思わず口ずさんでしまつたが、いなうと思つた山田は校門の内側でタバコを吸つていた。

「おひつ。町田！ またお前か」

「ひやつ」

卵を割つたらひよこが出てきた位の衝撃だつた。校門の影に山田が隠れてるなんて思いもしなかつたから。

山田はタバコを砂に押し付けて、火を消してから「職員室へ来い」と応援団長のような口ぶりで言つた。

校門の横にある自転車置き場へ自転車を置く間、山田は私の背後にいて、ねつとりとしつこいような目で威嚇する。本当に、お母さんのバカ。電話をかけてくれていたら、可愛い娘はこんな目に合わなかつたんじやないの？

「先生、私、逃げませんから、先生先に職員室へ行つててください」あまりに、しつこい目線だつたので、思わずそう言つてしまつた。この前みたいに、山田に連れられて職員室に行くのは目立つから嫌。また他の子達に噂されそうだし。新学期そうそう変なイメージがつくのはどうしても嫌。

「何だと、お前反省してない様だなつ

「いえ。そんなつもりじゃ

「言い訳なんて100年早いぞ」

山田の耳は口バの耳かもしれない。生徒の訴えは聞かないような仕組みになつていて。

私の言葉に余計逆上してしまつた山田は、私の首根つこをつかまえた。悔しくも山田に引きずられながら廊下を歩くという格好になつてしまつた。

丁度朝の会が終つたようで、職員室前の廊下は、音楽室に移動する生徒や、運動場に移動する生徒がバタバタとあわただしく行き交つていた。他の生徒にみせつけるようヒパフォーマンスする山田を恨めしく思った。

他のクラスの子や上級生がジロジロと私を見た。

「あいつ、髪の毛なんか染めてえらそつだな」

ざわざわする廊下の中からそつと聞こえた気がする。染めてなんかいないのに……。

人の噂の8割は嘘でできている。と最近私は思う。

職員室に連れていかれ30分が経過。1時間目はもう始まつている。生徒の学習する権利を奪つてもいいのですか？ 先生。

「……だから、わかつたな。明日までに反省文。原稿用紙5枚つ！ やつと開放された。

ポケットの中身まで丁寧に出すよつと言われ、かばんの中の持ち物までチェックされた。

先生に言われてから飴は持つて来ないよつとしたし、規則違反のものは何も持つてきてない。それにしても、ノートにはさんだ手紙がみつかつたら大変だ。私は気が気じやなかつた。

何でこんなに目をつけられるんだろう。本当に嫌になる。

職員室を出て、シーンとした廊下を静かに歩き教室に向かつた。1年の教室は1階にあって、私のクラスの5組は廊下の突き当たりにある。

深呼吸をして、5組の後ろの戸を開けた。

「また遅刻かよ！ ブス」

田立ちたがり屋の慎也だ。また、いつものよつと無視をすればいいつて思った瞬間、慎也の足にひつかつて、私は地面に倒れこんだ。

「 いつ たー 」

膝を打つた。自分でも大げさだと思う程、膝から出た血は、脛を伝つて床に落ちた。これには慎也もびっくりした様子で、私は痛いと思つよりオロオロとした慎也の顔をみて、ざまあみろつて思った。

「 先生、町田さんが怪我します 」

数学の梅岡がやつと騒ぎに気付いて振り返つた。梅岡は、数式の途中で邪魔されたと言わんばかりに不機嫌で、面倒くさそうに「誰か保健室に連れて行つたつてくれ」と言つた。

ハイ！ って美穂の声が聞こえたが、疲れていた私は「 1人で行けます 」 とうつむいたまま出て行つた。

私は足を引きずりながら、職員室の隣にある保健室に初めて入った。

「5組の町田です。足を」

50代くらいのパーマをかけた何処にでもいそうなおばちゃんが、保健室の先生。入り口で立つていると、にっこりとして寄ってきた。

「はじめまして。それにしても、まあ派手に出血したのね。痛くな

い?」

「はい。あんまり」

「そう。消毒するからここへ座つてくれる?」

おばちゃん先生は私を椅子に座らすと、棚から救急箱を出して傷の消毒をはじめた。

「そんなに傷は深くないわ。大丈夫。どうしたの? 転んだの?」
久しぶりに人から質問をされた気がした。

日当たりの良い保健室。横にみえるベッド。昨日あまり寝ていな
い私は、急にそのベッドに眠つていたくなつた。だから、痛くもな
いのに大げさに振舞つてみせた。

「やっぱり痛くなつてきました。横にならせてください」

怪我人らしく弱々しい声を出してみた。

おばちゃん先生は、私の嘘に騙されたのか騙されなかつたのかわ
からぬけど、すんなり「そうね、寝てらっしゃい」と言ってくれ
た。

「先生、ありがとう」

後で起きる事も知らずに、私はその白い布団の中にスルスルとも
ぐつこんだ。

どれだけ寝たのだろうか。今、何時間目だろうか。なんて寝ぼけ

た目をこするとかーテンを隔てた向うでおばちゃん先生と誰か女子生徒が話しているのを聞いた。

「あなたが悪いんじゃないんだから、大丈夫よ。お母さんわかつてくれるわよ」

「わからずやのババアだから何を言つてもダメや」

「それはだめよ。誤解されたまんまでいるつていけない事よ」

「でも、どうやつて説明すんだよ。わつと話すだけ無駄だつちゅうの」

「悪いくせね、翔子ちゃん。きちんと親と向き合わなくちゃ」

「翔子先輩じゃん……。何故か「まづ」ってこいつ感情になつて、

私は布団をすっぽり頭からかぶつた。

翔子先輩の家も何か複雑そうだ。親のことをババアって呼んでいた。途切れ途切れにしか聞こえないので何の話をしているかわからぬが、聞いているうちに翔子先輩が可哀想に思えてきた。「何を言つても信用してくれない」つてもらっていた。

しつの場合はどうだらう。信用とかそんなのはわからないけど、何を言つても聞いてくれないってところか。今度ババアって言つたら、お母さんどんな顔するだろ？

いろいろ考え方をしていると「町田さん」つておばちゃん先生の声がした。

布団をすっぽり被つている私の傍まできて、ポンポンつて布団を叩いた。

「もうすぐ給食よ、どうする帰る？ お母さんに連絡しまじょうか」
そんなに寝てしまつたのか。翔子先輩はまだ保健室にいるんだろううか？

とりあえず質問に答えなくちゃと思つて、私は布団から飛び出した。

「お母さんは夜仕事なんで、今電話しても寝てます。多分」

「そう、町田さん夜はお父さんと一緒になの？ きちんと寝れてる？」

「いえ、お父さんはいません」

おばちゃん先生は、何かかわいそうな子を見るよつな田で私を見た。

「じゃあ、夜はあなたの他に大人は？」

「いません」

「まさか、1人なの？」

そんなに驚かれるとは思つてもなかつた。物心ついた頃からそんなにだつたから。確かに人と環境が違うのは最近になつてわかつてきたけど、おばちゃん先生の顔を見ていたら急に不安になつた。

私は夜1人でいることは全然平氣。これから先もその生活が続く。そんな顔で見られたら、自分が可哀想に思えてくる。やめて、先生。

「1人だけど全然平氣」

私はお決まりの台詞を口にした。でも、今日は上手く言えなかつた。最後の方は下唇をぐつとかみしめて……泣きそうになつたのバレないだろうか。

「疲れてるのかもね、町田さん。給食、ここに食べる？ そうね、そうした方がいいわね。クラスまで取りに行つてあげるから待つてね」

私は何も言つていないので、先生はユサユサと体を揺らしながら保健室を出て行つた。

「ふう――」

ため息が出た。ため息をするとどんどん幸せが逃げるつていう。

私の体の中からどんどん幸せが逃げていくのがわかる。

「お前、この前の遅刻の奴だな。名前は？」

急にカーテンが開いて、翔子先輩の顔がのぞいた。

「町田です。町田ユウ」

「選挙かお前つ

「すみませんつ

茶色に染めてくるくるとパーマのかかつた髪。まともに顔も見たこともなかつたけど、よく見るとすごく綺麗。中森明菜に似てるかも。親に殴られたらしく、左目の周りに青くシャドーがかかってい

て、より一層迫力を増している。今、こうして話してるのが嘘みた
いだ。

「あのさ、話聞いたんだけどさ、お前夜一人で留守番か？」

「あ、はい」

しばらく沈黙があつた。翔子先輩まで私に同情してゐるのか。そつ
つたとき。

「うらやましいよーー」

つて、翔子先輩は少し舌を巻いた感じで言つた。うらやましいな
んて言われたのは、多分はじめて。いつもガン飛ばしてゐる翔子先輩
とは程遠く、無邪気な様子に私は惹きこまれた。保健室もそう、翔
子先輩も。何か私の居場所つて感じがする。きっと。

「うちなんかよ、暴力親父とわからずやのババアと赤んぼの3重苦
を背負つてんだぜ。時々、赤んぼのオムツまで替えさせられるし。
てめえらだつて、赤んぼできるようなことしてゐるつつのこ、男と
会つてただけでボコボコだぜ。ムカつく」

弾丸のように翔子先輩の口から言葉が飛び出す。途中、翔子先輩
が「男と会つて……」つていつた時、例の手紙のことを思い出した。
今、渡すチャンスだ。

「あ、あの。翔子先輩」

先輩はまだ話に夢中だったが、私が声をかけたので不思議そうに
私のことを見た。上田遣いをされると、やつぱりビビる。

「先輩はいらねえよ」

「あ、の。翔子……さん」

「だから、何だ」

スイッチが入つた翔子先輩はやつぱり怖い。でも今がいいチャン
スだ。勇気をふりしぼつて続けた。

「昨日、やすつて人から手紙を預かつたんですけど
「はーん? お前、やすさん知つてんのか?」

ヒヨエー、眉間に皺を寄せて睨まないでください。そして、トイ
レでボコボコにしたりなんかごめんです。

「い、いえ。通りすがりに手紙を渡してくれって。手紙にやすって

書いてあつたから」

「お前、手紙みたのか？」

「あ、『』、『』めんなさい」

「どうでもいいけどさア、そいつ車だつたか？」

「いえ、バイクで。あの、前髪が金髪で、目がこんなんで」

私は両方の目じりを上げて真似してみた。

「あはははははは。おもれーなお前。その人はハルさんだよ。んで、手紙は？」

「あ、いけない。教室に」

そう言つたところで、おばちゃん先生が2人分の給食と私のかばんを持ってきた。

「いいタイミングじゃんドラちゃん」

「まあ、またそんな名前で呼ぶう」

保健室のドラちゃん先生は、翔子先輩の肩に寄りかかって、よしよしつつする様にパーマのかかった髪を撫でた。この先、私はこの保健室で何度もお世話になることになる。それだけ、居心地が良くて私の場所。そう思えるところだ。

早速、かばんの中から例の手紙をだして、翔子先輩もとい翔子さんに渡した。中身をみて翔子さんはゲラゲラと大うけしていく、昨日心配していた事はあっけなく解決した。

「やすさんって格好いいんだ。お前も会つてみるといいよ。今度集まりあるし。どうせ夜はお前一人だろ？」

「うん」

「お前んちつてどの辺？迎えに行つてやるよ」

翔子先輩と一緒に給食を食べながら話した。それにしても急な展開でびっくりした。翔子さんと話せるとも思つてなかつたし、まさか一緒に遊ぶ約束までするなんて思つてなかつた。もう一つビックリした事があった。翔子さんは、汚い言葉使いの割りには、上品な食べ方をする。てっきり、肘なんかついて食べるつて思い込んで

たから。

人は見かけによらない。

この言葉を思いついた人は立派な人に違ひない。

給食を食べてから、翔子さんはもうひと寝入りするからって、保健室に残つたんだけど。私は保健室にいる気も、教室に帰る気にもならずそのまま家へ向かつた。サボるのは初めてだしサボつてる自分に驚いている。それにしても、今日はいろいろな事があった。

翔子さんの顔を思い返してみる。好奇心旺盛で優しい目は新しい発見だつた。そして、佐倉団地に続く坂道で出あつた不良は「ハル」っていう名前だつてことも知つた。光を受けてキラキラ光る金色の髪が、風を受けてふわっと舞い上がるところ、かすれた声、切れ長の目、やんちゃそうに笑うところが何故か頭の中から離れない。こうやって、自転車をこいでいても、バイクの音が後ろからするたびに、もしかして？ っていう気になつてしまつ。あさつての夜に集会と呼ばれる集まりがあるみたいで、翔子さんに誘われた。そこにいけば彼に会えるのだろうか。手紙の主の「やす」って人にも……。いろいろ考え事をしていたら、この前の海岸沿い公園にさしかかつた。夜見た海は真つ暗で、不安に飲み込まれそうだつたのに、今目の前にある海はキラキラと光が乱反射してとても楽しそうに飛び回つてゐみたい。私は吸い込まれるように公園に入つて行つた。

最近出来たばかりの公園はこじんまりしていて、ベンチと時計台、ブランコと少し変わつた形の滑り台があつた。何の変哲もない公園で、これといつて子供たちが遊んでいる様子もない。誰が何の目的で作ったのかわからないけど、私が暇をつぶすにはもつてこいの場所になりそうだ。今帰つたら、お母さんに怒られるかもしれないし、言い訳を考えるのも面倒くさい。そんなところ。

「あんた学校はどうしたの？」

ベンチに座つていると不意におばさんの声がした。振り向くと、くるくるときついパーマをかけたおばさんが歩道から険しい顔でこちらを見ている。こんな時間にボケーッと海を見ていたら、そら怪

しまれるのは仕方が無い。言い訳を探していると、おばさんは呆れたような顔になつて「言えないならいいけど、お母さん心配するよ」とおせつかいを焼いた。

心配なんか……って喉元まで言葉がでかかつたけども、知らないおばさんに言つたつて仕方が無い。でも何でだらう。今まで普通に暮らしてきた。不満はあつたけど、今よりももっと小っちゃい頃もがんばってきたのに。最近の私はどうしたんだらう。かうくいらいらして、悲しくて、そして寂しい。

「やだ、あんた。おばさんね怒つてんじやないよ」

私が泣き出したのでビックリしたらし。その場に居辛くなつたので、ビックリするおばさんを後にして家の方へ自転車を走らせた。今までしまつておいた涙がどんどんどんどん溢れ出す。泣きたくなんかないのに。

泣きながら自転車に乗つてゐる姿は、さすがに誰にもみられたくない。私はものすゝいスピードで走つていて、気が付くとアパートの前まで来ていた。

今日は「ただいま」も言わず、そつと家に入つた。

「おかえり。今日は早い口なの?」

最近のお母さんは機嫌がいい。自分から「おかえり」だなんて珍しい。

「うん。そう」

一生懸命涙を拭いてきたつもりなのに、お母さんにはわかつたらしい。通りで出合つたおばさんと同じように驚いた表情をしていた。何だ、お母さんでも私のこと心配するのか? ってそう思った。

「何、その顔?」

「うん。転んだら痛かつたから」

私は膝に大げさに巻かれてある包帯を指さして言つた。

「あはは、コウはまだまだガキだね」

人の気も知らずお母さんは笑った。本当に機嫌がいいらしい。笑つた姿なんて久しぶりのような気がする。いつも暗く珈琲を飲んでる姿しか思い浮かばないから。

私が不思議そうにお母さんの顔を見上げると「今日はお母さん休みもらつたから、どつか食べにいかない?」ってそう言つた。

「うそ?」

「あんたに嘘ついてもしょうがないでしようが」

「やつたー!」

やつぱり私はお母さんの言つ様にガキなかもしれない。本当に本当に本当に久しぶりの外食に浮かれていた。急いで部屋に入つて着ていく服を選んだ。

「これがいいかなアー」

着替えてはお母さんに見せて「ちょっとダサイわね」って言われるとまた替えての繰り返しで、30分ほどかかつてやつと決まった。赤と白のギンガムチェックのシャツに黒の吊りズボン。裾をくるくるつて折つて。そう今日のテーマはチェックカーズ? なんちゃつて。

だけど、私の幸せはいつだつてつかの間。ピンポンと呼び鈴が鳴つて、お父さんもどきが入つて来たのでげんなりした。お母さんが休みの時に、もれなく付いてくるお父さんもどき。喋るわけでもなく黙々とごはんを食べ、寝る前にウイスキーを飲む。「もどき」について知つてているのはそれ位。遊んでくれるわけでもなく、何を話すわけでもなく、私には不思議な存在で仕方が無い。

私がイライラして的原因は「もどき」にある。せっかくのお母さんの休みにわざわざ来ることないのに。何だか私とお母さんの生活を邪魔されたような気がして本当に腹が立つた。許せない気分でいっぱいになつた。

「やっぱ行かない。お母さん達、2人で行つて来て!」

「何で。あんたの好きな焼肉よ」

もどきは食卓の椅子に団々しく座つてこちらを眺めている。

あの人大っ嫌い。そんな文字が浮かんだ。今まで、嫌いなのに言わなかつたのは、お母さんが可哀想だつたから。いろんな事が重なつて、私の我慢を入れる箱がいっぱいになつて来ているのが自分でわかる。

「お母さんと2人だつたら行くけど」

「何それ？」

「あの人大っ嫌い！ ユウの家に連れて来ないでっ」

「そんな言い方」

お母さんは不機嫌な顔をさせたら天下一品だ。あの顔を見ないで済むように精一杯おべんぢやらを使ってたのかもしれない。

「私、絶対行かないから！」

自分の部屋に入るとき、わざと大きな音をたてて戸を閉めた。

「ユウちゃんの気も考えずにごめん。僕、今日は帰ります」

「すみません。せつかく誘つてくれたのに」

ふすまごしの会話。聞きたくなくて耳に入つてくる。私のせいで外食がなくなつたから、お母さんはきっと怒つてるに違いない。明日の朝まで絶対出るもんかつて覚悟を決めた。ぐーっとお腹の虫が鳴つた……。

楽しみにしていた外食はつらがられ、何も食べずに籠城した私だつた。そのまま眠つてしまつたみたいで現在、夜中の3時半。今、こつそりと冷蔵庫を開けているところ。

冷蔵庫の中にはハムとチーズ。食パンの残りがあったので、パンにそれらをはさんで食べた。部屋は全部で3つ。玄関入つてすぐ左がお風呂、そしてトイレ、キッチンの順になっている。玄関入つてすぐ右の6畳間は私の部屋、ふすまをへだてて奥がお母さんの部屋になつていて、お母さんの部屋とキッチンは隣り合わせになつていて、細心の注意を払つて冷蔵庫の開け閉めをして、食料を確保した後は速やかに自分の部屋に戻つた。

「はーー。疲れる」

パンも音をたてないように、焼かなかつたので、なんか美味しい。それでも何も食べないよりはまだと思つことにした。勉強机に腰掛けながら、パンをむしゃむしゃ食べていろいろ考えた。今晩の集まりのことを。

茜や美穂、弥生が翔子さんとの事を知つたらどう思うだろう。やめた方がいいって言うだらうか。茜は頭が良くて優等生を絵に描いたような性格だから、きっとまた話をしてくれなくなるかもしれない。美穂はどうだらう。きっと、私のことを心配してくれる。私が部屋にこもつている時に足のけがを心配して電話をかけてくれた。弥生は？ 弥生なんかにはわからないだらうな。お嬢様だから。何でも新しいものばかり持つていて彼女には反抗する材料がないようと思える。家だつてピカピカだし、きっと何でも買つてくれる優しい両親に育てられたんだらうじ。

夜中に悩んでいることについて考え方をすると、大抵取り返しのつかないくらい暗い気持ちになる。パンの最後の一 片を頬張るとまたベッドに潜りこんだ。

また、山田に怒られないよう田中覚ましをせひとセシトした。

「あ！」

忘れてたー。「明日までに反省文。原稿用紙5枚つー」って書つ

山田のねつとりした口調が頭をよぎつた。

「バカ！ バカバカッ」

枕を壁に投げつけた。

朝、あれから反省文を書いていたので寝る時間がなかつた。そのおかげで遅刻は免れたけど、気持ちはどんよりとしてどうもスッキリしない。

昨日休みだつたお母さんは起きていて朝「はんを作つていた。何？ 昨日の事怒らないの？ 珍しい。

「おはよう」

「……」

「（はん食べないの？」

田玉焼きの焼ける匂いがした。

「いらない」

「昨日も食べてないんだから食べなさい」

急に母親つぽくならないでよ。反抗しているのが悪いみたいに思えるじやん。

匂いに誘われて、食べないという決意はすっかり揺らいでしまつた。不機嫌な顔のまま食卓に向かつて、何も言わざがつついた。

「コウや、田中さんのことどう思つ？..」

お母さんは猫なで声をだした。田中つてのは「もどき」の名前。どう思つても何も昨日言つたじやない。私とお母さんの生活を邪魔する人。根暗で無口で不思議な存在。

「……」

「そんな顔しないでよ。田中さんはいつもコウのこと心配してんのよ。年頃の女の子が夜に一人だと可哀想だつて

「どういう事？」

私は多分、凄い顔でお母さんを睨んだと思つ。そろそろお母さん
つて呼ぶのやめようか……。

「夜働くのやめようかなつて。それでね、夜働けないとなると収入
が減るわけよ」

母は私の向かい側の椅子に腰をかけ珈琲をすすりながら続けた。

「田中さんがね、一緒に住もうかつて」

「冗談じゃない。バカにしないでよ！！！ なんで今更なの？ 小
学生の私がいくら頼んでも夜の仕事をやめなかつたくせに。私のこ
と心配だつて言つてるけど、結局「もどき」と結婚したいだけじや
ない。

「やめてっ」

勢いよく机をバンつてやつたら、お皿がすべつてパリンッて音を
たてて壊れた。お皿にのつていた目玉焼きもぐちゃぐちゃになつた。
後ろで母のため息を聞きながら、私は家を飛び出した。

大人は勝手だ。私の気持ちも知らないで。あんな人に生活を邪魔
されるくらいなら、私は一人でいた方がまし。いつその事心配なん
てしてもらわなくていい。

「おいつ。町田！ 今日は早いんだな」

校門で山田に声をかけられた。

今、むしょうに腹がたつてんの。声をかけないでよ！

「ちょっと待て」

通り過ぎようとしたら、後ろから制服をつかまれた。他の子達は
私の事をジロジロ見ながら校庭の方へ歩いていく。クラスメイトも
何人か通り過ぎた。

山田が何か言つ前に、原稿用紙5枚をかばんから取り出すと、投
げつけるように渡した。

「おまえー、その態度はなんだ」

山田が何か言いかけたので、走つて教室の方へ逃げ込んだ。
ちゃんと反省文書書いてたじゃない！ 生徒指導なんて言つてゐ
けど、ただのいびりじやん。もつ私のことはほつといて！
教室に入った。さつき校門を通りすぎた子たちが、私の事を見て
ヒソヒソ話している。

いちいち反論するのも面倒くさいので、机に突つ伏した。

「おっはよー」

しばらくすると美穂がやつて来て、私を揺り起こした。

「ね、昨日電話にも出ないから心配したんだよ」

「あ、ごめん。寝てたから」

「それにも慎也つてやりすぎだと思わない？」

美穂は横目で机の上に偉そうに座つている慎也をチラッと見ると、
小声でそう言つた。

「ほんと。でも、相手にしてないから」

「へー！ ユウつて大人だね。私なんか昨日ユウが保健室に行つて
から、腹がたつて腹がたつて、ずーーっと慎也の事睨んでた」

美穂がする一つ一つの仕草が屈託の無いもので、とても純粋な存
在に思えた。美穂は私の事を大人だつて言つたけど、そうじやない。
ただ冷めてるだけ。母がよく言つてた。あんたは子供らしくない。
可愛くないつて。だから、アイドルの写真を大事に持つてキャーキ
ヤー騒いだり、必死にソフトボールをやつてたりする美穂がうらや
ましい。何かに熱中したこと、今までに何も無い、私……。

「美穂、あのさ」

家の事、翔子さんのこと、急に相談したくなつて喉元まででかか
つたけど教室に入ってきた茜の姿を見つけたのでやめた。

「どうしたん？ ユウ」

「ううん。また一緒に買い物行こうね」

「もちろん」

美穂の笑顔がまぶしかつた。

「茜おはよー」

美穂も茜の姿をみつけたよう手を振った。今日は機嫌が悪いらしい。小さい声でおはよーと言つと、私達の方へは来ず前から2番目の自分の席に座った。

「ねー、気になつてたんだけどさ、茜つて小学校の時からあんなんだつたの?」

「あんなん? あーうん。機嫌が悪いとあーなる」

「ふーん。最初は気がつかなかつたんだけどさア。この前もね、私が宿題忘れたから『おさせとつて言つたら、『写』したらすぐ返してねつて怒られたんだよ」

美穂はまだまだ言いたい事があるつて顔だつたけど、あや子先生が入つてきたので着席した。

「皆さん、おはようござります」

爽やかな声でそう言つたけど、その後に「町田さん大丈夫でしたか?」つて言つたのが余分だつた。

「バス、昨日サボったのかよ」

案の定慎也が食いついた。本当になんなんだろ?。

「松山君、まず町田さんに謝るべきなんぢゃないかしら。それに、ブスつて人の事を呼ぶのも失礼だと思つわ」

松山つていうのは慎也の苗字。あや子先生、慎也なんかに言つても無駄だよ。

慎也は知らん顔して2つ向うの席からあつかんべーとした。

「困つた人ね」

あや子先生は顔を曇らせた。

「先生、社会見学の班を決めるんぢゃなかつたんですか? 時間なになります」

めがねの学級役員が手をあげた。みんなざわざわとなつて、誰と一緒にになりたいとか口々に話しあじめたが、私にはどうでも良かつた。青くて透き通つた風が教室に入り込んできて、ふと窓の外に目をやつた。

早くいいから出たい。やつはつた。

1日が過ぎるのが長く感じた。給食の時間が過ぎ5時間目などは睡魔に襲われ、「コクリコクリとなつて、はつとして目を開ける。そんな感じだつた。よつぱど、調子が悪いから保健室に行きますつて言おうとしたけど、また慎也にからまれるのが嫌でやめた。慎也が怖いとかそういう訳じゃない。私は目立ちたくないだけのこと。普通……。そう、普通にごはんを食べて、普通に学校に行って、普通に帰る、大きくなつたら普通の〇」。結婚して子供を生んで……そして、絶対子供には寂しい思いなんかさせない。そう決めてる。旦那さんは……普通の人かな？ うん、でも普通よりは格好いい方がいいに決まつてる。贅沢かア。

「はい、宿題のプリント。後ろの人回していつて
わら半紙で作られた手作りプリントが1枚ずつ渡された。

「はい」

前の席の尾崎君が振り返つてプリントを渡してくれた。そういうえば、このクラスの人とあまりしゃべつていらない気がする。いつも美穂か弥生か、気分がよければ茜の3人。3人が誰かとしゃべつたりすると、私はいつも自分の席にボーッと座つてたりする。

前の席の尾崎君は佐倉地区の子で、頭が良さそうな顔をしている。いつも静かで目立たないけど、決してひ弱ではない。自分を持つてるという表現があつてるのかな？ 尾崎君みたいな旦那さんだったらしいかも。顔も悪いことないし。

そんなことを思い始めたら、急に尾崎君の背中をじーっとみつめてしまつた。きつちりそろつた髪、清潔そうな制服。誰に対しても紳士的な彼。

恋は突然やつてくるつて本か何かで見たけども、これが恋なのかな？ だつたらいいな。

「はい、必ず宿題やつてくるように！ 忘れたら、運動場5周して

もううからな。わかつたな

「えーー」

梅岡は言いたいことだけ言ひと、チャイムと共に去りぬだつた。

放課後、茜と自転車置き場で一緒になつた。彼女にとつては予期せぬことで、何だか嫌そうな顔をしていた。きっと私の思い込みだろうと思って、遠足の班決めの話やら、この前美穂と買い物に行つた事を話してみた。帰る方向が一緒なので自転車を押しながら一緒に進んだ。

「でね、この前美穂と行つた店ね、写真なんかもたくさんあるし…」

…

「うん」

「ね、びうじたん？ 茜げんき無いね

「別に」

茜はそつけない口ぶりだつた。昔からそつ。一度、私が茜に同じような態度をしたら、泣きながら謝つて！ って言われて、その上クラスの女子みんなに私が酷い子だつてことを言いふらした。

でも、なぜなんだろう？ 何で今まで友達だつたんだろう。自分でもわかんない。ただ言えることは、彼女にとつての私は、友達でも何でもない。便利な道具でしか過ぎないつてこと。言いすぎだろうか？ ううん違う。5年の時に茜がクラスの女子から総スカンをくらつた時に、泣きついてきたのが茜だつた。私だけしか話す人がいなかつたんだと思う。6年になつてやつとみんなから話してもらえるようになつた茜は、私の母が夜の仕事をしているつてだけで私を無視した。今までよく考えなかつたけど、最近いろんな事がわかつってきたような気がする。わかつて？ 違うなア。そうだ、世界がみえて來た、この表現が一番あつてる。少しずついろんな部分が見えてきて、世の中には綺麗な部分も汚い部分もあるつてことが分かつってきた。

小さい頃は、何もかもが純粹で、綺麗な部分の中でもキラキラと輝いていたというのに。

最近思う。人間は何も考えない、何も知らない方が幸せなんだってこと。

「ごめん私先行くわ」

茜は素っ気ないふりのまま自転車にまたがった。

「茜！」

「何よ」

私の強い口調に茜は驚いた様子だった。

「もうやめよ！」

「コウ……何のこと？」

「友達」「こ」

茜はその場でしばらく凍り付いてたみたいになつてたけど、私はゆっくり深呼吸をして自転車を走らせた。風がふわりと舞つた。

家に着いた。今日は「ただいま」は言わない。玄関の鍵は開いていたので奥に母がいるはずだけど、玄関からすぐの自分の部屋にそいつと入つた。

「ユウ！　帰ってきたの？」

見つかつた。

「ただいま位、言いなさい。ほんとに可愛くない」

話したく無かつたので、私はベッドに横になつて知らん振りを決めこんだ。

昨日から寝てないので、ウトウトとしかけたけど、今晚の集まりのことを考えると、怖さ半分、興味半分でなかなか寝付けなかつた。ハルつて人にも会えるんだろうか。

30分くらいたつただろうか。母が玄関から出て行くのを聞いた。怒つてたんだろう。私に声もかけず働きに出て行つた。

ジリリリリリリリ

電話の音がなって、私はベッドから飛び降りた。家にかかってく
る電話はほとんどない。きっと翔子さんだろ？

「つはい。町田です」

翔子さんだ。自分でかけてきたのに第一声が「あ、お前、町田？」
つて。ほんと面白い。

「7時にさ、やっちゃんが仕事終るって言つから、8時頃迎えに行
くよ。ダサい服着てくれじゃねーよ」

「はいっ」

翔子さんは律儀な人だと思った。わざわざ迎えにくる時間まで電
話してくるんだから。人間の価値は外見だけじゃないって台詞をよ
く聞くけど、本当にそうだと思つ。茜なんか、連絡もせずに約束を
破るくせに、クラスでは優等生で通つてる。勉強ができて、服装が
真面目なだけ。何でこんなに熱くなつてるんだ？。自分でも不思
議なくらいだ。

それにしても、ダサい服着るなつて言われたけどどうしよう。不
良が着るような服なんて持つてないしなア。

私が迷つていると、あつといつ間に約束の時間になり、10分く
らい遅れて翔子さんたちがやつて來た。アパートの前から爆音が聞
こえたので、呼び鈴を鳴らさなくともすぐに翔子さん達だとわかつ
た。

スマートの張つた黒い窓が開いて、やすさんつていう人が顔を出
した。

「こいつか？　お前のダチつて」

「こんにちは」

「あはははー。こんにちはだつてよ」

何がおかしいのか、やすさんは大笑いした。黒い髪にパー、二
重の彫の深い顔が印象的だつた。あの時の手紙のイラストによく似
てる。ケラケラと面白そうに笑つてゐるやすさんは子供っぽい感じ
だつた。車に乗つてゐんだから18歳は過ぎてんだろ？など。

翔子さんは後ろの座席のドアを開けて「乗りな」って言った。

- 10 -

翔子さんは助手席に座ると、やすさんと何やら話しあじめた。
「ねえ、『カリ...』さんはあたし達の事知つてんの?」

翔子さんは甲子さんと話す時は、幾分女らしく話す。

「ユカリは関係ねえよ。もう別れたしな」

「そつちは良くて、じつちがシメられたりがうすんのや?」

「でも、お前もう俺の車に乗つてんじやん。集会にユカリが来るの

知つてて乗つたんだろ？」

「まあね。あのババア最初っから気に食わねーしな」

「翔子ちゃんのそんな強気なところが好きー」

ヤマトさんは和が後宮座席にいるのはやがてわざと見つけた。もしやがして、私が乗つてゐるのを忘れてゐるのか? なんて思えるほど

だ。

「なー、ちゃんとやんのいるよ。」

私が窓の外を眺めていると、急に翔子さんが振り返った。

「う。私はそう呼ばれて、なんか仲間として認められたんだなつ

て感じがした。

「うーん。やあたまつてモヒカルんですね」

そりや俺の「」と放しておぐ女なんかいのはすない「でせ」
もすやしが「」にさけるのを横用い見ながう、羽をさは続け

「あー、マジドーの人生がどうな

おたしに決してこの人好きなければね……」「貴君? その騒つた瞬間。道略の真ん中

んの隣。たつまでのふざけた態度は消えて、「俺先」って助手席の

翔子さんを抱きしめた。後ろを走っていた車は、車線変更をし、追

い抜かすときにやすさんの車を睨みつけた。

正直に生きている人たち。今まだよく分からぬいけどそう思つた。学校も通り過ぎ、しばらく海岸沿いの道を行くと、閉店したパチンコ屋さんのだだつ広い駐車場がみえてきた。その敷地の中にはすでに数台の車と10数台のバイク、そして男と女の姿がみえた。

「コウ、今回のは支部だけの集まりだからこんなもんだけど、本部の人らもきたらほんと、スゲーことになるぜ」

翔子さんは目を輝かせた。

「ふーん。 そうなんですか」

「何だよコウ！ もつと感動しろよ」

何でも感動できる翔子さんがうらやましいです……。

ブンツ

つて一瞬の出来事だった。私が光るライトやふざけている人たちを面白そうに見ていると、後ろから一台のバイクが横切った。もの凄い速さだった。

「また、あいつう」

やすさんはそう言つてスピードを上げバイクを追つかけた。

「あつあぶねーだろー」

翔子さんは意外にも、スピードに弱いようで、しつかりとシートベルトをしている姿がかわいくみえた。

「くつそーハルの奴。奇襲攻撃かア」

やすさんはそう咳いて、バイクの後ろを必死に追いかけたが、途中で追つかけるのをやめた。

「あいつ、何考えてんだろうな

やすさんはボソッと咳いた。

風みたいにフワツつて飛んでったバイクは、また地面を滑るようになこちらにつつこんでくる。サイドミラーすれすれに逆走してくるバイクにやすさんはついに降参した様子だった。やすさんはハンドルを左に切つて、側道すれすれのところで車はようやく止まつた。

「お前死ぬぞっ！」

やすさんは窓を開けながら大声で叫んだ。

「また、俺の勝ちっ」

そう言つて覗いたやんちゃな顔。少しだけ目が合つた。

「翔子さん、あの人だ。手紙渡してくれた人」「あーそつか、あれはハルさん。やつちゃんの大親友だよね、やつちや」

「うつせー。あんな奴知つか」

やすさんはさつきの事をまだ悔しがつていて、車を停めるなりハルさんのもとへ飛び掛つて行つた。私と翔子さんはしばらく車の中に居て、周りの人を窓越しで観察しながら、翔子さんが注意しなくちやいけないことを事細かく教えてくれた。

「一応な不良は不良でも上下関係は厳しいからな、目上の人にはさんをつける事！ それからあの棒を振り回して赤い髪の奴、あいつには近づくなよ」

「なんで？」

「あいつは、手が早いんで有名だから。いいか？」

「あ、はい」

「そんで、あいつらは仲いいから後で紹介すつとして、あーいたいた、あいつ」

翔子さんはもの凄く嫌な顔をして金髪のくるくるヒーパーマのかかつた女を指さした。

「あれ、ゆかりババア。一応年上だからゆかりさんって呼んであげてんだけどさ、あいつ気に食わなくてさア。あんな奴、挨拶だけしたら相手する事ないからなつ」

「ゆかりさんって、やすさんの元彼女の？」

「お前、喧嘩売つてんのか、アン？」

「い、いや」

「とにかく、あたしの傍にいねえとお前みたいなネネは、すぐにやられちやうからな。氣つけろよ」

翔子さんの表情がじろじろ変わるのが面白い、ついつい顔を眺

めていた。翔子さんは説明だけすると、車を降りようとしたけど、1つだけ聞きたいことがあった。

「あの、ハルさんって人は？」

「何だ？ ハルさんはさつきの金髪だって言つただろ？」

「あ、うんそうじゃなくて」

「何だよ、周りくどいな」

「翔子さんとも友達なんですか？」

「友達？ んーそんなんじゃないな。やつちゃんとは仲いいけど。つていうかさ、あたしとやつちゃんも最近付き合う事になつたわけじゃん。それまでは集まりで顔を合わすだけだったから正直どんな奴かわからんけど、すんごい硬派つて話。ま、いわゆるやつちゃんは軟派な方なんだけどなつ」

「ふーん。彼女とかいるのかな？」

「何だよお前。好きなのか？」

「ううん、違う。気になつただけ」

「はーん、やめとけよ。ハルさんはいつも彼女いねえ時ねえもん。あの顔だろ、硬派ときたら誰もほつとかないよ。上の方の人らもハルさん好きな人いるから、もしコウがハルさんと付き合つことになつたら、半殺しでは済まなくなるな」

翔子さんは腕組みをしながら、上目使いで私の方を見た。

「ま、付き合うことなんかまず無いから安心しろよつ」って私の肩をポンつてたたいた。

「お疲れっす」

しばらく翔子さんの後ろをついて歩いた。会う人、会う人、挨拶をしながら通り過ぎた。ドラマで見たことがあるような格好をした人達の集団。何で、こんな所にいるのか自分でもわからなかつた。バカ笑いをしている人、上目使いにこちらを見てくる人、いろいろだつた。

「おい、翔子、挨拶なしかよ」

歩いていると後ろから女の人の声がした。

「あー、ユカリ……さん。お疲れっす」

翔子さんの眉間の皺が大変なことになつてゐる。ユカリさんといふ人は少しほつちやりとしていて、金髪のくるくるパーマで真っ赤な口紅をしていた。皿の上には青いシャドー。何ともいえない威圧感があつた。

「お前、やすと付き合つてんだつてな」

「……」

「ま、別にあんな男どもいいけど」

ユカリさんははき捨てるよつに言つて、翔子さんの肩がピクつてなつたのがわかつた。

「どうでもいいんなら放つていてください」

上の歯と下の歯がくつついた状態で翔子さんはそう言つた。ユカリさんは翔子さんを挑発して楽しんでいた。取り巻きの数からいって、ユカリさんの方がここでは身分が上なのかもしれない。翔子さんは思いつきり感情を押し殺していよいよを感じだつた。

「お前の後ろにくつついてる中坊誰だよ？ つてかお前も中坊だつたよな。あははっ」

「つるせー」

翔子さんは捨て台詞を残して、やすさんの方へ歩いて行つた。

「くつそあいつ生意氣だよな」

そんな声が後ろからした。ドラマの世界がここに広がつてゐるような気がしてワクワクした。翔子さんはそんな私の姿を見て「お前、怖くねーのかよ？」つてビックリしていた。

1人で留守番してゐる時の方がよっぽど怖い。玄関のドアが開いて怪獣が入つてくるとか、殺人犯が逃げ込んでくるとか、小さい時からいろいろな想像をして布団の中に逃げ込んだ。最近では慣れただけど、心靈特集なんかのテレビを見た後なんかの部屋は、薄紫色の煙が漂つてゐるようで身震いがする。少なくとも、それに比べたら、何も怖いことなんかない。

だつてここにいるのは人だから。

「おい、翔子、どうしたんだよ。そんな顔して
やすさんは4、5人で集まつていて翔子さんに声をかけた。その
中にはハルさんもいた。

「やつちゃん、何であんなババアと付き合つてたんだよ?」
「ははーん? やきもち翔子ちゃん」

「バカッ」

2人は付き合いはじめらしい。やすさんの仲間も面白そうに2人
をからかう。私はふざけあう人たちを少し遠巻きから見ていた。
「んで、やつちゃんたの?」

「のりつお前余計なことを」

やすさんはのりつて呼ばれている角刈りのでぶつちょの男の人の
頭をげんこつでぐりぐりとした。

「コウ、じつち来なよ」

しばらぐやすさんとじやれ合つていた翔子さんは、離れたところ
にポツンといる私を呼んだ。

「誰? 小学生?」

「違うつて。この子はコウ。ほんで、コウ、じつちはヒロシ。ヒロ
シはあたしとタメだから」

「タメ?」

「そんなこともわからんねーのかよ。同じ学年つかうじと」

「コウちゃんつていうんだ。翔子さんが連れてるつて」とは港南中
か?」

ヒロシさんはにきびがいつぱいあって、ちつちつと顔をしている。

「あ、はい」

「うわーかつわいい。普通の子々々に見た」

「何だよそれつ。あたしは宇宙人かつ」

翔子さんはそう言うとあとの2人を紹介した。

「この人人がマブさんで、えーっとハルさん」

2人はこつちを見ると、少し会釈しただけだつた。別に興味ない

という風に、また違う話をみんなでし始めた。
疎外感とまではいかないけど、仲間に入れないのが少し寂しかつ
た。

しばらく話に入れずに一人空を眺めた。キラキラと輝く星。ちっちゃい頃に、おじいちゃんとかぶと虫を探りに行つた時に見た星に似ていた。おじいちゃん達と母は仲があまり良くないみたいで、私が小学校にあがつた時くらいから遊びには行つていない。毎年贈られてきた誕生日プレゼントも、中学校に入つてからは届かなくなつた。きっと母は愛情を受けて育つてないから、私にも冷たいんだつてつい思つてしまつ。

——動物園の動物は赤んぼの育て方も分からなくて育児放棄することもあるのよー

遠足で動物園に行つた時、飼育係りの人人が言つた台詞をなぜだかよく思い出す。

「コウ、何だよ。おなか空いたんか？」

翔子さんが心配して声をかけてくれた。

「つうん、だいじょうぶ」

「大丈夫じゃねえよ。絶対おなか空いてる顔だつて。バカだなア遠慮すんなつて」

翔子さんは勝手にいろいろと解釈をして、とつとつ食べ物を買ひに行く話に発展した。

「やつちゃん。車出してくれない？」

「何だよ、着いたばつかだぜ。そうだ、ヒロシ！ お前めし買いに連れてつてやれよつ。ついでに俺にもジャムパン買って来てくれ」「ええージャムパンつすか。お子ちゃまですねえ、やすさん。やすさんが車貸してくれんんだつたら俺行きますけど」「ぶつけんなよー」

そう言つてやすさんは車の鍵をヒロシむんに向けてポーンッと放

つた。

「あ、痛えつ。この野郎つ！ やす」

運悪くハルさんの額に鍵が命中した。命中したと同時にハルさんはボンッと瞬時にやすさんに駆け寄り彼のお腹を捕らえていた。

「くつ……お前つ」

「ちよつ、ハルさんやり過ぎつす」

ヒロシさんが止めに入つた。他のメンバーは、またいつもの事だと言わんばかりに冷ややかに見つめていたが、とても高校生には見えない髪のマブさんにいたつては、タバコをふかしながら咳き込むほどゲラゲラと大笑いをし始めた。

「おあいこじやんつ」

ハルさんは悪びれた様子も無く言い放つた。やすさんはかなり痛そうにしている。

「連れてつてやるよ」

ハルさんが来いつて田で合図をした。切れ長の綺麗な田だと思つた。

「お前襲うなよ」

他のメンバーが離し立てるのを一蹴するようにハルさんは言つた。

「こんなガキ襲うかよ」

もつと違う表現でも良かつたのに。ハルさんの言葉に軽くショックを受けた。

「ふり落とされんなよ」

バイクが走りだすと、私の背中^{いのち}からかいつなやすさんの声が響いた。

意外にもハルさんはゆつくりと走つてくれていた。後ろから追い抜かしていく車を眺めながら風が流れるのを感じた。

夜の景色、夜の風、そしてハルさんの髪の香り。ハルさんの腰に

手を当てて後ろに載つていてる自分が不思議でしうがなかつた。

結局、5分ほど走つて着いた店で、ハルさんは、やすさんのジャムパンとお菓子など、メンバーの分を手当たり次第に入れていつた。

「お前は？」

ハルさんが私の顔を覗き込んだ。

はじめてハルさんと話す。ふわふわの金髪、切れ長の目、細いあ

い。

私は緊張してしまつて、思わず目の前の「金ちゃんラーメン」をかごに入れた。

「アホか」

ハルさんはそう言つて、私が入れた「金ちゃんラーメン」をかごから取り出すと元の棚に戻した。

「湯、どこで入れんだよつ。変わつた奴だな」

「あ」

「つたく、ガキ！」

ハルさんは言葉の割りには一コ一コと笑つていて、笑うとのぞく八重歯は発見だつた。クラスの尾崎君とは違つ、何だらう。この気持ち。

今もの凄くドキドキしている。

お金を払つてゐるハルさんを後ろでみつめながら、翔子さんの言葉を思い出した。

——ハルさんはいつも彼女いねえ時ねえもん——

そうだよなあ。同じ空氣を吸えば吸つほどハルさんの格好良さが、体に染みていく感じがする。緊張はしてるけど、それが逆に心地よくて、ずっとこうしていたいって感じ。

私の今の想いは、一時のものなんだろうか？

「お前、これ持てる？」

大量の食べ物の入つたビニール袋を手渡され、片方の手でハルさ

んにしがみつき、片方の手に袋を持って、ハルさんの後ろにのつかった。

相変わらずバイクはゅっくりで、やすさんと競争していたハルさんは別人の様だった。

力サカサカサカサと風をうけ音をたてるビニール袋。片手でつかまっているので、自然と力が入る。気がついた時にはハルさんの背中に顔を押し付け、体全体につかまっていた。

「おいつ。力入れすぎだろ」

「あ、うん」

「お前、ガキのくせに胸はあるんだな」

「……」

ひやあー。誰が硬派だつて言つたの？

私は思わずハルさんの背中から離れると、上体を反らした。くつくつくつくとハルさんは笑つてているようだつた。

不意に後ろから拡声器のウインツつていう大きな音に続いて「そこの坊やたちー、ちょっと止まりなさい」って声が鳴り響いた。

「やべつ。ポリカよ」

私がチラッと視線を後ろに向けると、パトカーがついて来ているのがわかつた。

「しつかりつかまれよ」

ハルさんはそう言つと、おもむろにスピードを上げた。

さつきまでカサカサ鳴つていたビニール袋は風を含んでバツサバツサと大げさな音をたてた。

「……うよつ」

「え？」

スピードを上げれば上げるほど、風の音で全く声が聞こえない。めまぐるしく消え去つていく景色。私は目を開けて、流れて消え去つていくライトを見た。異次元にいるような感覚だった。

執拗に追いかけてくるパトカーを振り切るように、バイクはどんどんスピードをあげていく。さすがにスピードがMAXまで達する

と、落ちはしないかという不安が頭をかすめ、ハルさんの腰に巻いた自分の手がしびれるほど力を入れた。

丁度目の前に大型トラックが立ちふさがった。パトカーもすぐさま追いつき、トラックとパトカーにはさまれるような形になった。

「くそつ」

トラックが左に指示器を出した。

減速しないとトラックにぶつかってしまう。しかし、減速すれば、パトカーに周りこまれつかまってしまう。

「ブーーーン

ハルさんは減速するどころか、スピードをあげた。曲がろうとするトラックの左に周りこみ、気がつくとバイクはトラックの前方に躍り出た。

ファンファンファン

トラックのクラクションが鳴らされる。轟音が背中を押す。スピードをあげているのに周りはスローモーションで幻覚を見ているような感覚に襲われた。

パトカーも負けてはいない。追い越し車線からトラックを抜くとバイクの横に並んだ。

「いいかげんに止まれっ」

明らかに警察も動搖している様で、先ほどとは全く違う怒号ともとれる声で叫んだ。

「……なげろっ」

ハルさんが何か指示を出している。

「え？」

「なんでもいいから投げろっ」

ハルさんの言われるまま、片手でビニール袋の中にあるジャムパンをパトカーのフロントガラスに向けて投げた。

ジャムパンはフロントガラスに命中した。袋はぱすっと地味な音をたてて破れた。

「ポテトチップスもあつたる」

「うん」

私はハルさんの背中と自分の体の間にポテトチップスの袋をはさみ、片手で封をきつた。

ハルさんは加速し続け、パトカーの前方に車線変更をした。

「いいぞっ。今だ」

ハルさんに言われるとおりに袋を持ってパラパラパラパラとポテトを撒き散らした。

桜吹雪のように散るポテトがパトカーの視界を一瞬だけ遮ってくれた。

「あつはははは」

ハルさんはミラーにそれらを見て大笑いした。

地味な作戦ではあつたが、奇襲攻撃が良かつたのか、パトカーはひるんで減速した。

「やりー！」

ハルさんは気をよくしたのか、大声で叫んだ。

「ユウ！ 逃げるからな、つかまれ」

段々と回復して速度をあげるパトカー。しかし、パトカーがひるんでいる間にバイクとの距離は離れ、とうとうハルさんは逃げ切った。

はあはあはあ……あつははははは
久々に大笑いをした。

10・逃走（後書き）

これはフィクションです。
良い子の皆様は真似をしないようにしてください。

私たちが戻つてくると、やすさんがツカツカとやつってきた。

「おいつ。何してたんだよ、お前！」

「何つて、ポリに追つかれられてよ」

周りがざわめきたつ。

「ハル！ お前アホか」

「あん？」

「ポリがけつにひつついでたらどうすんだよ。集会してんのバレるやないかっ」

ハルさんは一瞬いたずらな笑顔を浮かべた。

「ポリやつ！ バツくれろ」

みんな逃げる時は早い。遠くの方に居た人たちも、こちらの動きを察知してか、瞬時にバイクにまたがった。やすさんは慌てて車の方へ走つて行くところだった。

「んちゅつて。うつそだもーん」

「んのやろーてめえ」

やすさんは走つて戻つてきて、また、ハルさんと喧嘩がはじまつた。

私はまだ、バイクに乗つかつたまんまでその様子を見ていた。
「いつまで乗つてんだよ！」

後ろから、翔子さんとは違う声がした。かすれた女の人の声。ゆかりさんつていう人とも違う。威圧感のあるその声に、私はバイクを慌てて降りて振り返つた。

茶髪のパーーマが多い中、その女の人は真っ直ぐな黒髪のワンレングスで、髪の毛は胸の当たりまで伸びていた。その強い眼差しに私は目をそらした。

「香里さん、すいません」

慌てて翔子さんが駆け寄り謝つた。

香里さんと呼ばれる人は、ふんつと髪の毛をかきあげると私には背を向けてハルさんの方へ体を向けた。

「久しぶり」

「ああ」

呆然と一人を見ていた私に、翔子さんが「ジロジロ見なさんなつておばちゃん口調で言つて、私の服の裾を引っ張つて離れたところへ連れていかれた。

「綺麗な人……」

ついつい見とれてしまつような黒髪に華奢な体。遠くから香里さんとハルさんの姿をボーッとみつめた。

「だから、コウ、ジロジロ見んなつて

「だつて凄い綺麗」

「香里さんは別格や」

ハルさんと香里さんが何か話している。似合ひの2人。やつぱり気になる。何だらうこの気持ち。私の気持ちに気付いているのかいないのか、翔子さんは香里さんについて話しあ始めた。

「港南連合に本部と支部つてのがあるのは話しただろ? 香里さんの彼氏は涼さんつていうんだけど、もともとは本部の偉いさんだからしくつて。独立みたいな形であたし達のいる支部を作つたつてわけ」

「ふーん」

「本部は喧嘩上等な人らが多いんだけど、こつちは走り命つて感じ」「涼さんつて、じゃあここでは一番偉い人なの? ね、誰? 誰?」「涼さんつて軽々しく呼ぶんじゃねえつて。それにな、支部長は滅多に来ねえよ」

長い間、ハルさんと香里さんは話している。それも真剣に。何話してるんだらう?

「何で香里さんはハルさんと喋つてんの?」

「知るかつ。つーかわ、おめえいつからタメ語きくようになつたんだよ!」

翔子さんはどうでもいい所でキレる。

「あ、えーっと、香里さんがハルさんと一緒にいるのは、どうしてなんでしょうか？」

「そりゃ友達だからだろ。同じ中学校だつたつて話。でもなあ、なんとかその敬語ムカつく」

「……」

怒った翔子さんの顔はやつぱり怖い。でも、香里さんの迫力には負ける。

「ユウや、もしかしてハルさんに惚れちゃつたか？」

「ううん」

わかんない。今はただ氣になる。それだけ。

私が翔子さんと話している間、前や後ろをいろんな人が通りすぎた。翔子さんは中学生つてこともあって、ここでは下の方みたいだけど、やすさんと付き合つてゐるつて事で、上の人らにも声をかけられていた。

「翔子さん」

「ん？」

「気になつたんだけど、集会つて何するの？」

「おめえまた、タメ語かよつ」

翔子さんは呆れたようにため息をつくと「集会つてよ、仲間に会いに来るつつう感じかな」と呟いた。私はてつ生きり、ドラマで見たようにバイクで走り回つたり、何か話し合つたりするもんだと見てたので、少々拍子抜けをした。

「まあ、うちん所は割りとフレンドリーだけだ。本部なんかは女は集会に入れてくれねえし、あたしら中坊なんかも入れてくんない。厳しいんだぜ」

「不良も大変なんだ」

「何だよユウ、お前変わつてんな」

翔子さんは何本目かのタバコに火をつけてふかしはじめた。

私の視線の先にはハルさんと、香里さんの姿がある。もつともつ

とハルさんについて知りたい。もう一度、彼の後ろに乗りたい。そう思つた。

香里さんと話すハルさんは、少し重たい表情でふざけた様子は全然みられなかつた。

何を話してゐるの？

香里さんはハルさんから離れて、ゆかりさんのいるグループの方へ歩いていった。私は香里さんの姿を目で追つた。ゆかりさんは頭を下げてコチコチに固まつてゐる。

「あつはは、ばばあの野郎。ガツチガチになつてやんの」

翔子さんはその様子をみて大笑いしていただけど、香里さんがこちらに向かつてくるのがわかると、翔子さんは慌てて吸つていたタバコの火を消すと直立の姿勢をとつてゐた。

「翔子、久しぶりだね」

「は、はい久しぶり」

間近で見る香里さんは、やはり綺麗すぎるくらい綺麗で、人形を見ているようだつた。かすかに漂う甘い香水の匂いが香里さんを包んでいた。

香里さんは私の事など眼中にないという感じで、翔子さんだけを見て話した。

「あんた、これからは集会には来ない方がいい」

翔子さんの顔色が変わつた。

「んで……？　あ、あたし何か悪いこと……」

「そんなんに驚くなつて。あんただけじゃなくてさ、ゆかり達にも言つといったから」

「でも、なんで？」

「本部の総長あたまが変わつただろ、そいつ涼と仲が悪くて、支部のことも最初つから認めてなくつてさ」

「はい」

「ぶつ潰すつて言つてる連中もいて……あんたらがいる時に、本部の奴らが乗り込んできたら、確實に足でまといになるだろ」

「はい」

「ハルにも伝えた。涼が本部と話をつけるまでは、集会は控えてつて。わかつたか」

「は、はい」

翔子さんは香里さんの姿が遠ざかるまで、ずっと硬直していた。

「ふーーーっ。緊張するぜっ。なつコウ」

「格好いいーー！」

「おい？ ユウ？」

私は一日で夜の街に溺れてしまつた様だ。

香里さんが待たせている車に乗り込み去つて行くと、ハルさんの所へ人が集まりだした。

みんな、ハルさんが口を開くのを待つていたけど、角刈りで太つたのりさんは、少し急いたように口火を切つた。

「涼さんは？」

「しばらく、本部が忙しいつてよ」

ハルさんは少し面倒くさそうに言つた。片手をズボンのポケットにつつこんで、首を傾げている。

「それにしてもよ、最近涼さん俺らのことなんか、どうでも良くなつたんじゃねえの？ 本部、本部つてよ」

赤い髪の人が言つ。かなり挑発的な態度だと思つた。

「海藤！ てめえ、涼さんのことそんな風に思つてんのかよ」

やすさんが海藤と呼ばれている赤い髪の男を睨むと、髪のマブさんも参戦した。

「誰がこの支部を作つたんか、もう忘れたんか！ あほ」

「んだと？ お前ら涼さんに気に入られてるからつて偉そうにすんじゃねえ。俺は涼さんについてきただけで、お前に指図される覚えは無いんじや」

海藤さんの後ろにいる背の高い男の人2人が前に出てきた。顔がよく似ていて初対面でも双子というのが私にも分かつた。その、海藤さんの周りには双子のほかに5、6人がいて、何やらものものしい雰囲気でハルさんのグループを睨みつけていた。

「やんのか？ こらつ」

やすさんは一步前へ出て、戦闘姿勢をとると、海藤さんも待つてましたとばかりに前へ出る。手につかまれた鉄の棒……。

あんな棒で殴られたらどうなつちゃうんだろう？ 私はゾッとした。

「仲間割れしてると場合じゃねーだら」

マブさんが、やすむと海藤さんの間に入り込む。

ハルさんはやはり何もしなくて、面倒くせに体を傾けたままでいる。

「仲間割れ？ は？ 仲間なんて思つてなんかねえよ。集会つってもガキがチャラチャラつるんで走つてるつてだけで面白くねえんだ」

「ひみ

海藤さんはカツヒツとぽんを吐き捨てた。

「なんだこりゃー！」

下顎を突き出して睨むやすむの額には、血管が浮き出している。でぶつちゅのつせんやり、ヒロシさんもやすむの後ろに立ち参戦する。

海藤さんに握られた鉄の棒があがる。

「コウ、コウ、やまこよ。やつちやんあんなんで殴られたら

横の翔子さんの声は震えている。

私は意外と冷静だった。まるでドリマを見てこむような感覚で。現実が現実に感じられないのは今に始まつた事じゃない。よくある事。それは、時には都合が良い。自分が体験してゐるはずの嫌なこと、怖いことが現実では無くなるから。嫌なこと、辛いことは全部ブランク管の中で起きてこない」と、私には関係なこと思つみつしてきた。

するいかもしれないけど、やつむつと生きてきた。だつて楽なんだもん。

だから、何も感じたりしないし、冷静でいられる。でも。言い返せば、私は何かに強く心を揺さぶられたりした事が無い。そう、感動つてゆづやつ。

感動の無い毎日は淡淡と過ぎて、時々だけど、生きてる意味あんのかなつて思う。時々？ 「つづく……多分違う。

私の生きてる意味つて何？

「喧嘩やりてえなら、よそに行けよ」

今まで面倒くさそうに構えていたハルさんは、海藤さんの鉄の棒が振り落とされるかという一瞬の隙をぬって、やすさんとの間に入つた。

人だかりでよく見えない。

カンカラカンカン

鉄の棒が転がる音がした。

「なつ……」

双子の男の片方が素つ頓狂な声をあげた。

そこにはおなかを押されて地面にうずくまる海藤さんの姿。

「すきだらけだな」

ハルさんはやんちゃな顔で笑つて、驚いてるやすさん達に向かつてピースサインをした。

「お、おい。ハル……血、血」

やすさんの言つとおり、ハルさんの額からは血が伝つている。

ハルさんは全く氣にもとめずバイクの方へゆっくり歩いて行つた。

「走つてくる」

ハルさんは手をあげてバイバイをすると、猛スピードで大通りを駆け抜けた。

真つ直ぐに、真つ直ぐに。

その後ろを、慌ててのりさんヒロシさんマブささつて感じで、皆がハルさんの後ろに続いた。

「ユウ、何眺めてんだよ。早く、車に乗れよ」

翔子さんがやすさんの車の助手席から身を乗り出して私を呼ぶ。私はボーッと突つ立つていて、翔子さんがやすさんの車に乗つたこともわからなかつた位、ただあつけにとられていた。

車に乗つたあとも、こちらを睨む大男2人と鉄棒男、悔しがる数人の男をみつめた。

「ハルさんって強いんですね」

とつさに思つていることが口に出た。

「あいつにいいとこ全部もつてかれたな」「やすさんは呟いた。

「ハルにはかなわねえよ」

フロントガラスの向う側を、身を乗り出すよつて見入つたけど、もつすでにハルさんの背中はみえなくなつていた。

もつ一度会いたい。

それが、集会の感想。

「なあ、じつからどうする?」

やすさんは翔子さんの肩に手をおいて、意味ありげにしゃせやいた。「つんだよ。突然触んじゃねえよ」

翔子さんはビクッとしたので、やすさんはケラケラ笑つた。

「可愛いんだ、翔子ちゃん」

「うるせえつ。バカにすんじゃねえよ」

「てれてる?」

「バカッ」

そんなわけで2人には後部座席の私という存在は無いらしい。きやつきやどじやれ合つ一人を少しうらやましく思つた。

「あ、そうだ。マブさんとは、あそこ落ち着くんだよなあやすさんが思い出したように言つた。

「そつか、そうしょつか」

「ねえ、コウや。どうする? お前も行く?」

翔子さんが、やつと私の存在を思い出してくれたようだ。

「今、何時?」

「えつとな、0時40分」

そんなに時間が経つてたなんて思いもよらなかつた。何て楽しくて、スリルがあつて、そして寂しく無い夜。

「お母さんが2時頃帰つてくるから、私もう帰る」

「お母さんだつてよ。お前可愛いな」

翔子さんは変なところで褒める。

結局、家に着いたのは午前1時だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2738e/>

あの日に。

2010年10月14日18時37分発行